ヒューマンサイエンス リサーチ VOL. 9 2000 (313〜328)

総　説

コーピング尺度の開発とその信頼性の検討に関する展望

日下部 典 子*・千 田 若 菜**・陳 峻 文*
松 本 明 生*・筒 井 順 子***・尾 崎 健 一****
伊 藤 拓*・中 村 菜々子*・三 浦 正 江*****
鈴 木 伸 一******・坂 野 雄 二*******

要　旨

コーピングの測定と尺度の開発に関する従来の研究を展望し、今後、コーピング尺度を作成するときに考慮するべき要因の検討を行うことが本研究の目的であった。

国内外のコーピングの測定と尺度開発に関する465本の論文(海外360本、国内115本)が収集され、その中からコーピング尺度を作成している53論文が検討の対象とされた。多くの研究においてWays of Coping Checklistが用いられており、Folkman & Lazarus(1984)のコーピング概念に基づいて尺度が作成されていた。

検討されたコーピング尺度は、その対象者によって、学校領域（大学生と小中高校生)、職場領域、一般領域、臨床領域、その他の領域に分けて検討された。小中高校領域の尺度は、学校における生徒の対人関係あるいは学業における問題に対するコーピングの特徴を捉えていた。大学領域では、一般成人での使用を想定して作成されているものが多かった。職場領域の尺度は、その下位尺度に認知的コーピングが含まれているものが多かった。一般領域では、問題焦点型のコーピングが含まれている尺度が多かったが、対象が限定されておらず、その使用に当たっては注意を要すると考えられた。臨床領域の尺度は、痛みやストレス、あるいは障害に対処するコーピングの測定を目的として作成されていた。その他の領域の尺度は問題解決、回避的、認知的対処が共通するコーピングとして含まれていた。

新しい尺度が次々と開発されていることが、研究間のデータを比較し、発展させることを困難にしている。また信頼性と妥当性の検討がされていない論文も多く見受けられた。５つの領域の尺度はそれぞれに領域固有のコーピングを含んでおり、今後それらの特徴をふまえた信頼に足る尺度の開発が必要であると指摘された。

キーワード：コーピング、コーピング尺度、下位尺度、信頼性、妥当性

*早稲田大学人間科学研究科
**早稲田大学人間科学研究科（現所属：神奈川リハビリテーション病院）
***早稲田大学人間科学研究科（同：鹿児島大学医学研究科）
****早稲田大学人間科学研究科（同：モトローラ株式会社）
*****早稲田大学人間科学研究科（同：大阪工業大学）
******早稲田大学人間科学研究科（同：岡山県立大学保健福祉部）
*******早稲田大学人間科学部・人間科学研究科

1．問題と目的

ストレスが心身の健康状態に影響を及ぼす重要な要因であることが、多くの研究によって示されている。また、ストレス反応には大きな個人差があることが知られている（Aldwin, 1994；Steptoe & Apples, 1989)。そしてストレス反応の個人差には、ストレスへの対処の仕方（コーピング）の違いが強く関与していることも明らかにされている（Lazarus & Folkman, 1984；Aldwin, 1994)。

コーピングは、古くは否認（denial）や知性化（intellectualization）といった防衛機制の理論の中で概念化されたものであり、脅威事態に適応するためのプロセスを表す言葉として用いられてきた（Zeider & Endler, 1996)。しかしながら1960年代に入ると、コーピングは脅威事態に対応するために行われる「意識化された行動」としてとらえられるようになった（Sidle, Moos, Adams, & Cady, 1969)。また、実験心理学の領域においては、コーピングは脅威刺激への接近―回避といった顕在化した「行動反応」として概念化されてきたが（Levine & Ursin, 1980)、近年になって日常生活におけるさまざまなストレス場面で行われるコーピングは、顕在化した行動反応だけでなく、諦めや肯定的解釈といった認知的反応を含むものであると考えられている（Lazarus & Folkman, 1984)。

Lazarus & Folkman（1984）によれば、コーピングは適応のためのプロセスであり、自動的な適応行動とは異なり、個人の努力を促して意識的に行われる行動および思考作用であると考えられている。また、嫌悪的な状況を処理しようとしてなされる努力であるということも指摘されており、「外的、内的な要求に対応するために行われる認知的、行動的努力」であると定義されている。一方、本邦では坂田（1989）が、「心理的ストレス反応の軽減を目的とした行動」と簡潔に定義している。

さらに、コーピングは機能の違いによっていくつかの下位分類がなされている。たとえばFolkman & Lazarus（1980）はコーピングを、①問題の解決に焦点をあてたコーピング、②ストレッサーによって生じた情動的混乱を調整することに焦点をあてたコーピング、という「問題焦点―情動焦点」の２種類に分類している。一方、Endler & Parker（1990）は、①問題焦点と②情動焦点に、③ストレス状況を回避することを目的としたコーピング、という「回避」を加えた３つの分類を行っている。しかしながらコーピングの捉え方は研究者によって異なっており、一致した見解は得られていない。また、これまでコーピングを測定する尺度は、さまざまな対象者を想定して数多く作成されているが、どのような対象者に対してどの尺度を用いることが有用であるかについて情報が共有されているとは言えないのが現状である。

そこで本研究では、コーピングの測定と尺度の開発に関する論文を展望し、これまで作成された尺度におけるコーピングの定義や分類法、尺度構成等（対象者、項目数、下位尺度、信頼性・妥当性）について整理を行うことを目的とする。また、作成された尺度が他の研究でどの程度引用・使用されているかという使用頻度についても検討を行う。そして、コーピングの概念がどのように理解されているかと、コーピングを測定するときの問題点を検討し、今後コーピングを研究するときに必要とされる要因の検討を行う。

2．文献検索の方法

文献の検索は、日外アソシエーツ株式会社によるデータベース「日外Web（キーワード：コーピング、対処、対処行動）」とAPA（American Psychological Association）によって提供されているデータベース「PsycLIT（key word: coping, inventory, scale, questionnaire, reliability, validity）」を用いて、過去20年間（1980～1999年）に刊行された文献を対象に

行った。さらに、我が国のコーピングに関する論文が掲載される可能性の高い雑誌（心理学研究、教育心理学研究、行動療法研究、心身医学、ストレス科学、カウンセリング研究、健康心理学研究等）を対象として、1988年から1999年までに掲載された論文のタイトルまたはキーワード中に、「コーピング」あるいは「対処」が含まれるものを加えた。

以上の検索の結果、海外文献においては350本、国内文献においては115本、計465本のコーピングの測定に関連した論文が抽出された。また、抽出された論文の中において、コーピングの分類や測度に関する引用があった論文はさらにその文献にまでさかのぼって収集し、検討対象とした。

3．コーピング尺度作成論文の年次別推移と使用頻度

以上の結果、展望の対象として抽出、収集されたコーピング関連論文の中から、コーピング尺度の作成を論じた論文を取り上げたところ、計53本（海外34本、国内19本）の論文が抽出された。これらの文献の発行数の年次別推移を示したものがFig. 1である。Fig. 1を見ると、コーピング尺度の作成論文は1980年頃から漸増傾向にあり、1990年代前半に17本と最も多くなっていることがわかる。

次に、作成された尺度が他の研究でどのくらい引用・使用されているかを見るために、検索の結果抽出・収集された465本の関連論文において、それぞれ尺度が引用された頻度をカウントした。以下にその結果を海外、本邦別に示す。

1）海外におけるコーピング尺度の引用件数

Fig. 2は、海外で作成されたコーピング尺度の使用件数を示したものである。これを見ると、Folkman & Lazarus (1980) が作成したWays of Copingの使用件数が計216と圧倒的に多いことがわかる。216件の中には、Ways of Copingの改訂版、特定の領域（スポーツや教育職）での使用を目的とした改訂版、ドイツ版、あるいはインタビュー版など多岐にわたる版が含まれている。これらには原版作成者のFolkmanらが改訂したものだけではなく、多くの研究者によって改訂されているものも含まれており、厳密には異なる測定尺度であると考えられるが、いずれもWays of Copingを基盤と

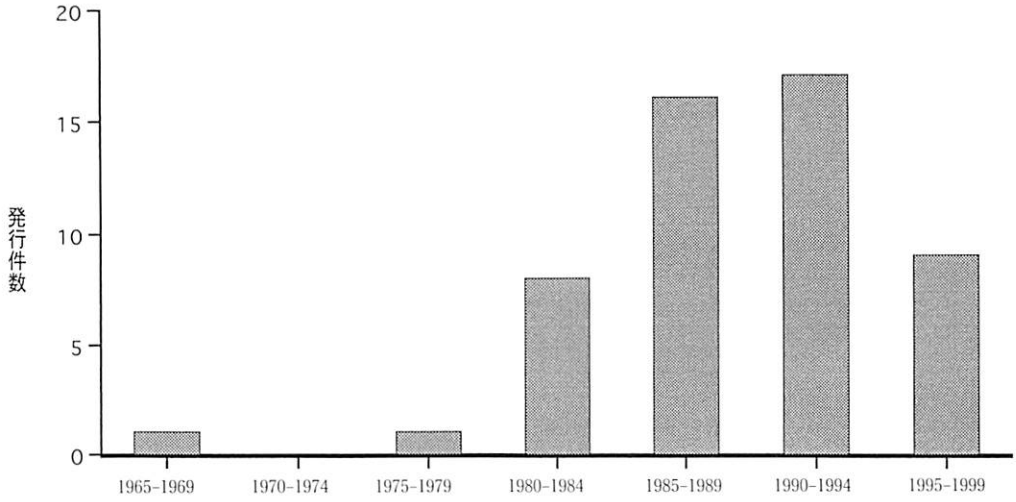

Fig.1　コーピング尺度作成論文の年代別推移

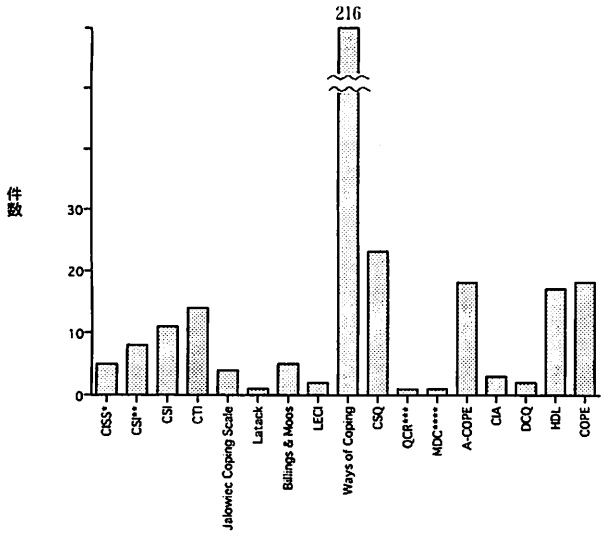

Fig. 2　主要尺度の使用件数（海外）

* Coping Inventory for Stressful Situations

** The Coping Strategy Indicator

*** The Questionnaire of Coping Responses

**** Measure of Daily Coping

したものであるために一つにまとめて示してある。このWays of Copingに続いて、CSQ (Coping Strategies Questionnaire：23件)、COPE、A-COPE（いずれも18件）、Health and Daily Living Form（HDL：17件）、CTI（Constructive Thinking Inventory：14件）、CSI (The Coping Strategy Inventory：11件）が比較的多く用いられている。しかし、利用頻度はいずれもWays of Coping関連の尺度の十分の一以下であり、近年の海外におけるコーピング研究では、Ways of Copingに基づいたものが大半を占めていることがわかる。

2）本邦におけるコーピング尺度の引用件数

Table 1は、本邦おけるコーピング尺度関連論文において、使用された件数が2件以上の尺度を示したものである。これを見ると、Lazarus & Folkmanの一連の研究が最も多く参考にされており、これらは海外文献において紹介したFolkman& Lazarus (1980) のWays of Copingと同一のものであることから、本邦においてもLazarusらの提示したストレスに関する概念 (Lazarus & Folkman, 1984) がコーピングに関する研究に大きな影響を与えていることがわかる。また国内の文献としては、坂田 (1989) が多く参考にされており、この研究が国内でのコーピング尺度の重要な先行研究として取り上げられていることがわかる。その他では尾関 (1990、1993) と尾関・原口・津田 (1991) の研究や、嶋田・岡安・戸ヶ崎・坂野・浅井 (1993) の研究が多く参考にされている。それぞれの研究論文の概観については、以下の第5項「領域別の検討」の項で詳しく述べる。

4．コーピング尺度の対象者による分類

Table 1　本邦におけるコーピング尺度の参考・使用頻度

コーピング尺度	数
Lazarus & Folkman (1980, 1984)	15
坂田 (1989)	8
尾関 (1990, 1991, 1993)	4
嶋田他 (1993)	3
三川 (1988)	2
諸井 (1989)	2
神村他 (1995)	2
岡谷 (1988)	2

注）その他、参考・使用頻度が1のものが42件ある。

本展望の対象となった文献を概観すると、多種多様な尺度がさまざまな対象者を想定して作成されていることがわかる。そこで、収集された論文における各コーピング尺度作成時の対象者の特徴や属性について、検討を行った。

作成されたコーピング尺度を、その対象者が健常群を対象にしたものか臨床群を対象にしたものかによって分類し、何らかの疾患や障害のある者を対象としているコーピング尺度を「臨床領域」における尺度とした。この領域には、疾患そのものに対するコーピング、あるいは障害や疾患があることから引き起こされる問題に対するコーピングを測定するための尺度が含まれている。さらに健常者を対象としたコーピング尺度を対象者の属性別に「学校領域」、「職場領域」、「一般領域」の3領域に分類した。「学校領域」に含まれる対象は、小学生から大学生ま

での各種学校に通う者であり、学業、人間関係などの学校場面でのコーピングを測定したものが多い。また「職場領域」では仕事に従事している者を対象とし、それぞれの職種に特有なストレッサーへのコーピングを測定した尺度がほとんどであった。「一般領域」では所属が明確でない成人（たとえば「地域住民」など）が対象とされ、日常的なストレッサーへのコーピングを測定する尺度が含まれた。一方、臨床、健常のいずれにも分類できない者を対象としたコーピング尺度を「その他の領域」とした。「その他の領域」には介護者などが含まれた。

各領域に含まれるコーピング尺度の件数を示したものがFig. 3である。Fig. 3を見ると、学校領域を対象にしたコーピング尺度が27件(51%）と最も多く、次いで一般成人を対象とした尺度が9件（17%)、職場領域を対象とした尺度が7件（13%)、臨床領域を対象とした尺度が7件（13%）であった。

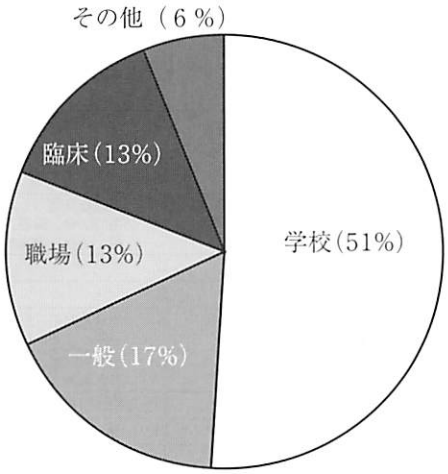

Fig.3　領域別に見たコーピング尺度の件数

5．領域別の検討

コーピング尺度の作成を行った論文として本研究の展望の対象となったものは、Fig. 2、Fig. 3に示された計53の論文であった。これらの論文について、作成者、作成年次、作成方法、下位尺度等の情報を領域ごとに示したものがTable 2である。

5-1　学校領域

学校領域におけるコーピング尺度の対象者は小学生から大学生まで幅広くまたがっており、尺度数も他領域に比べて多い（Fig. 3参照)。そこで、大学生とそれ以外（小学・中学・高校生）に分けて、学校領域での検討を行う。

1）小学生、中学生、高校生におけるコーピング尺度

小中高校生を対象として作成されたコーピング尺度の多くは、学業や人間関係など学校場面におけるコーピングを測定することを目的として作成されている（嶋田他，1993；三浦・坂野，1996など)。学校場面以外では、生活全般、あるいは学校場面とその他の生活場面の両方におけるコーピングを測定するために作成された尺度も見受けられた（Patterson & McCubbin, 1987；神藤，1998)。項目の作成は、先行研究を引用したもの（大迫，1994；三浦・嶋田・坂野，1997）もあるが、既存の尺度を用いることなく、小中高校生独自のコーピングを評価するために新たに項目収集し、因子分析の結果作成された尺度が多い（たとえば工藤，1986;Dise-Lewis，1988;嶋田他，1993)。これは、既存の成人を対象とした尺度では小中高校生のコーピングは測定できないためであると考えられる。

次に、コーピングの分類や下位尺度の内容を見ると、「問題中心型対処行動と情動中心型対処行動」(大迫，1994）のように、Lazarus & Folkman (1984) の「問題焦点－情動焦点」に基づいた分類を行っている尺度がある（たとえば，Patterson & McCubbin 1987;大迫，1994など）一方で、「積極的対処」（三浦他，1997）および「思考回避」（嶋田他，1993）といった接近—回避の方向でコーピングを分類している論文も見られた。下位尺度および項目の特徴としては、「相談」（三川，1988)、「サポート希求」（中村・兼松・内田，1993）といったソーシャ

Table 2　作成されたコーピング尺度の内容と信頼性・妥当性の検討

著者	発行年	尺度名	項目数	下位尺度	対象者	信頼性	妥当性
学校領域（小・中・高生）							
Dise-Lewis	1988	LECI	49	攻撃、ストレス認知、気晴らし、自己非難・我慢	中学生681名	α係数、積率相関係数	STAI、CBCLとの相関
Fanshawe & Burnet	1991	CIA	20	否定的回避、怒り、家族との交流、肯定的回避	中高生1699名	α係数	基準関連妥当性
神田・大木	1998		30	情動中心の対処、問題中心の対処	中学生193名	α係数、上位・下位検定	
工藤	1986		40	身近な気晴らし、違法行動、暴力、非行行動、音楽的活動、諦観、反抗行動、対人接触、無為、忍耐、彷徨、娯楽的活動	中学生199名		
伊藤	1993		17		中学生675名		
伊藤	1994		17		中学生676名		
三川	1988	対処行動尺度（青年版）	27	他責型対処、自責型対処、他者への相談、感情の分離、忘却、抑制、昇華	中・高・大学生434名		
三浦・坂野	1996		24	積極的対処、思考の肯定的転換、サポート希求、あきらめ	中学生423名	α係数	
三浦他	1997		15	積極的対処、回避的対処	中学生412名	α係数	
大迫	1994		10	問題中心型、情動中心型、社会支援型	高校1年生151名		
大竹他	1998		40	問題解決、行動的回避、気分転換、サポート希求、認知的回避、情動的回避	中学生712名	α係数	
Patterson & McCubbin	1987	A-COPE	54	感情の解放、気晴らし、行動の自立、ソーシャルサポートの希求、家族の問題の解決、問題回避、精神的支えの希求、親しい友人に頼る、専門家のサポートの希求、義務的仕事をこなす、ユーモアを忘れない、リラックス	中高生467名	α係数	基準関連妥当性
嶋田他	1993	小学生用コーピング尺度	16	積極的対処、諦め、思考回避	小学生1283名		
神藤	1998		19	問題解決的対処、他者依存的情動中心対処、回避的対処、積極的情動中心対処	中学生233名	α係数	
中村他	1993	A-COPE日本版	41	友達のサポート希求、自分で積極的に問題に取り組む、感情の表出、楽観的な状況把握、家族の力を求める、気晴らしとリラックス	小中校生276人	α係数	
学校領域（大学生）							
Endler & Parker	1990	MCI	44	課題志向、情動志向、回避	大学生130名	α係数、再検査法	基準関連妥当性、併存的妥当性
Epstain & Meier	1989	CTI	53	情動的対処、行動的対処、分類的思考、迷信的思考、楽観主義、否定的思考	大学生124名	α係数	身体症状、精神症状との相関
Folkman & Lazarus	1985	Ways of Coping Checklist-revised	42	問題焦点、希望的思考、距離をとる、ソーシャルサポートの希求、肯定的側面の強調、自責、緊張緩和、孤立化	大学生	α係数	構成概念妥当性
神村他	1995	TAC-24	24	情報収集、放棄・諦め、肯定的解釈、計画立案、回避的思考、気晴らし、カタルシス、責任転嫁	大学生、専門学校生1041名	α係数	
諸井	1989	孤独に対する対処方略	男：39 女：33	男：友達との接触、消極的受容、自己の改善、娯楽的活動、友達への自己開示、文化的活動、嗜好的活動 女：友達との交流、娯楽的活動、自己の改善、消極的受容、家族との交流、彷徨	大学生132名	α係数	基準関連妥当性
Otten, et al.	1989	Otten-Tucker Academic Anxiety Coping Scale	150	試験前準備、問題志向自己教示、緊張低減法、積極的問題解決、積極的注意焦点、正常化自己教示、強迫感、注意散漫、回避・放棄、心配、自己嫌悪、衝動	大学生	α係数、再検査法	基準関連妥当性
尾関	1990		20	協力、援助の依頼と被指示、問題の価値の切り上げ、開き直りと諦め、待機、気晴らし、攻撃、逃避	大学生668名	α係数、項目間相関	MPIとの相関
尾関他	1991		17	問題焦点、情動焦点、回避・逃避			
坂田	1989	SCS	58	計画、情報収集、再検討、努力、問題の価値の切り上げ、注意の切り替え、問題の価値の切り下げ、思考回避、諦め、開き直り、静観待機、被支持、協力、援助の依頼、気晴らし、自己制御、逃避、攻撃、正当化	大学生756名	α係数、I-T相関	
Sidle, et al.	1969		10		大学生60名	項目通過率	コントロール感、活動性等との相関
Tobbin, et al.	1989	CSI	72	問題解決、認知的再体制化、情動表出、サポート希求、問題回避、肯定的思考、自責、引きこもり	大学生524名	α係数、再検査法	

職場領域							
後藤・田川	1991		20	情緒調整－積極的対処、情緒調整－消極的対処、問題解決－積極的対処、問題解決－消極的対処	特殊教育担当教員134名		
Hatton & Emerson	1995	SWC-R	14	対処訓練、前向きな考え	LD者サービス施設、直接介護スタッフ181名	α係数、再テスト	基準関連妥当性
Kinicki	1990		20	制御型、回避型、予期型	失業者159名	相関,再テスト法	構成概念妥当性
黒田他	1988	対処行動チェックリスト	39	問題焦点因子、緊張緩和因子、未熟退行因子	会社員594名		
Latack & Meier	1986		61	コントロール、逃避、役割の曖昧性	管理職、専門職109名		基準関連妥当性
島津・小杉	1997		36	積極的な問題解決、逃避、他者からの援助を求める、諦め、行動・感情の抑制	会社員887名	α係数、主成分分析、確認的因子分析	構成概念妥当性
庄司他	1992	職場用コーピング尺度	39	肯定的行動・認知、症状管理、回避的行動・認知	会社員740名	I-T相関、α係数、折半法	構成概念妥当性
一般領域							
Amirhan	1990	The Coping Strategy Indicator	33	問題解決、サポート希求、回避	地域住民1923名	α係数、再テスト法	収束的妥当性、弁別妥当性
Billings & Moos	1981		19	問題焦点、情動焦点、積極的認知、積極的行動、回避	294世帯	α係数	
Folkman & Lazarus	1980	Ways of Coping	66	問題焦点型と情動焦点型	地域の中年住民100名	α係数、I-T相関	
Folkman et al.	1986	Ways of Coping-Revised	49	対決、距離をとる、セルフコントロール、社会的援助の希求、責任の受容、回避・拒絶、計画的な問題解決、肯定的な再評価	夫婦75組	α係数	
林他	1992	北里版心理的対処調査表（89）	53	直接問題中心型、問題分析型、対人的対策型、自分ではどうにもならない型、気持ちを紛わす型、じっとしている型	会社員293名、精神科外来患者119名、心身症患者29名、内科外来患者87名		
McCrae	1984	Coping Mechanism Scale	98	敵意反応、援助希求、忍耐、否認、感情表現、ポジティブ思考、気ぞらし、空想、自己避難、社会的比較、鎮静、抑制、資源補充、回避、他14項目	地域住民255名	α係数	
Perarlin & Schooler	1978			自力対アドバイスを求める、コントロールされた思慮対感情流出、肯定的比較、交渉、自己主張対受動的になって耐える	成人		
Roger et al.	1993	Coping Styles Questionnaire	60	合理的対処、超然的対処、情動的対処、回避的対処	大学生311名、サマースクールに通う学生211名	α係数、再テスト法	併存的妥当性
Stone & Neale	1984	Measure of Daily Coping	55	気ぞらし、状況の再定義、直接行動、カタルシス、受容、社会的支援、リラクゼーション、宗教、その他	地域住民など226名	α係数	内容的妥当性
臨床領域							
Billings & Moos	1984		32	評価焦点、問題焦点、情動焦点	抑うつ患者424名	α係数	
Jalowiec et al.	1984	Jalowiec Copig Scale	40	問題焦点型対処、緊張中和型対処、悲観・無力的・退行的対処、依存型	高血圧患者、急患患者141名	α係数、再テスト法	内容妥当性、構成概念妥当性
Kleinke	1988	DCQ	29	社会的支援、問題解決、自責/回避、怒り、耽溺、活動、薬の使用、刺激物の摂取、食行動、無視、テレビを見る	大学生396名、疼痛患者319名、退役軍人(精神分裂病)43名	α係数、再テスト法	基準関連妥当性
Kluwin et al.	1990	視覚障害学生用A-COPE	31	自己解決を図る、気晴らし、情動反応	視角障害を持つ学生324名	α係数	基準関連妥当性
岡	1987		19	男性：消極的処世、身体的克服、身体的活動、共感的救済、教養活動、虚無、読書 女性：諦観的処世、身体的克服、内面的自他救済、身体的活動、身体的いたわり、虚無	病弱児であった成人485名		
岡谷	1988			問題状況の再認知、お任せ、情報の探求、回避、感情の表出、問題と取り組む	ガン患者25名		
Rosenstiel & Keefe	1983	CSQ	44	認知的コーピングと抑圧、絶望、注意をそらすと祈り	慢性疼痛患者61名	α係数	
その他の領域							
Damrosch et al.	1985	Parntal Coping Scale (PCS)	69	認知の再構築、否定的感情の表出、願望的思考、自己非難、情報収集、脅威の矮少化、感情の伝達	ダウン症児の親38名		
翠川	1993		14	問題解決、接近・認知型、回避・情動型	在宅障害老人の主たる介護者518名	α係数	
野島他	1986		55	統合的対処、方策的対処、順応的対処、回避的対処	慢性疾患児の家族101名	α係数	負担感との相関

ルサポート利用型のコーピングや、「気分転換」(大竹・島井・嶋田, 1998) や「気晴らし」(Dise-Lewis, 1988) といったコーピングがほとんどの尺度に含まれている。

小中高校生を対象として作成された尺度は比較的サンプル数も多く、因子分析を経て作成されており、信頼性はほとんどの尺度において検討されている。しかし、妥当性に関してはストレス反応などとの相関を検討したPatterson & McCubbin (1987) や神藤 (1998)、また重回帰分析による検討を行った大竹ら (1998) があるものの、妥当性に関する記述のない論文も多く見受けられた。成人用を修正して用いるだけではなく、小中高校生独自の項目を含んだ尺度が作成されてきている点は評価に値する。

2) 大学生におけるコーピング尺度

コーピングの構成概念や特徴を明らかにするために、大学生を対象として作成されたコーピング尺度は比較的多く存在する (Folkman & Lazarus, 1985;Ottens, Tucker, & Robbins, 1989など)。しかしながら、小中高校生におけるコーピング尺度が子どもの学校場面におけるコーピングの特徴という明確な目的のために作成されている点とは異なり、大学生に特徴的なコーピング構造に着目することを研究目的として明記したものは多くない。

各尺度の項目の作成方法について見ると、項目の収集には、①自由記述によるもの (諸井, 1989 ; 坂田, 1989 ; Sidle et al., 1969)、②先行研究を参考にしたもの (Endler & Parker, 1990 ; 神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野, 1995 ; Folkman & Lazarus, 1985 ; 尾関他, 1991;Tobin, Holroyd, Reynolds, & Wigal, 1989)、③数名の専門家の議論によるもの (Heppner, Cook, Wright, & Calvin, 1995; Ottens et al, 1989) がある。また、Epstein & Meier (1989) は、上記①と②を組み合わせて項目を作成している。分類については、このように準備された項目について複数のカテゴリーを設定したものもあるが (Sidle et al., 1969 ; Ottens et al., 1989)、大部分の尺度ではクラスター分析や因子分析を行い、コーピングの下位概念を統計的に検討している。

また、コーピングの分類や下位尺度といった観点から検討する際、Sidleらの作成した尺度 (Sidle et al., 1969) が比較的初期のものとしてあげられる。Sidleら (1969) では、コーピングを防衛機制といった内的反応ではなく具体的な行動として測定することが目的とされており、コーピングの構造や分類といったコーピングをとらえる特定の枠組みが示されていないが、これに対して、その後に作成された多くのコーピング尺度では、いくつかの分類の枠組みが想定されているのが特徴である。最も代表的なものとして、Lazarus & Folkman (1984) の「問題焦点－情動焦点」の分類があげられるが、この分類に加えて、積極的に関わるか、無視して回避しようとするかという「接近－回避」の分類を取り入れている尺度が比較的多くみられる。たとえば、坂田 (1989) はコーピングを「問題焦点型」、「情動焦点型」、「接近型」、「回避型」などに分類することが可能であるとしている。また、尾関ら (1991) の尺度は「問題焦点型」、「情動焦点型」および「回避・逃避型」、Endler & Parker (1990) の尺度は「課題志向」、「情動志向」および「回避」のそれぞれ3下位尺度で構成されている。さらに、「認知—行動」といった反応・表出の分類を加えた尺度 (Tobin et al., 1989 ; 神村ら, 1995) があり、多岐にわたった分類が見受けられる。

また、大学生を対象に作成されたコーピング尺度は、信頼性と妥当性の確認が行われている尺度が多い点や、検討にあたって比較的多くのサンプル数が用いられている点が特徴としてあげられる。ここでは「問題焦点－情動焦点」や「接近－回避」などの下位概念が多くの尺度に共通して認められるため、因子的妥当性も高いと推測できる。一方で、本領域における尺度の中には、大学生だけでなく一般成人にも適用されているものが見受けられる (たとえば、Folkman

& Lazarus, 1985；坂田, 1989など）ことから、大学生を対象として作成されているにもかかわらず、大学生に特徴的なコーピングの測定を目的としているのか、一般的なコーピングの測定を目的としているのかという明確な区別がなされていないことも指摘される。したがって、対象者固有のコーピングの特徴を理解するためにも、尺度の改善が必要であろう。

5-2　職場領域

職場領域におけるコーピング尺度には、会社従業員のほか看護婦、教職員、介護スタッフ、失業者を対象とした尺度が含まれ、いずれも職種に特有なストレッサーへのコーピングを測定することを目的として作成されている。作成方法は、①自由記述で項目収集を行い因子分析したもの、②既存の尺度から項目を作成したもののいずれかである。

各尺度の共通した特徴としては、「肯定的行動・認知、回避的行動・認知」（庄司・庄司, 1992）、「諦め」（島津・小杉, 1997）、「前向きな考え」（Hatton & Emerson, 1995）というように、多くの尺度に認知的な項目が挙げられ、職場では認知的コーピングの測定が重視されていることがわかる。また、会社員を対象とした職場一般のコーピング尺度については、信頼性・妥当性の検討がなされているものの、職種に特化した尺度では対象とした人数も少なく、信頼性等の検討が十分になされているとは言えないのが現状である。このように本領域で用いられるコーピング尺度は、測定対象や測定目的が明確であるという利点がある反面、適応範囲が狭いことも指摘されるため、個々の研究で信頼性・妥当性の確認をより一層行うことが必要であろう。

5-3　一般領域

一般領域では、被験者の属性に依存しないコーピングのメカニズムの解明を目的として研究が始まり（Pearlin & Schooler, 1978）、日常的なストレッサーへのコーピングという点が強調されてきた。各尺度における項目の選択は、Pearlin & Schooler (1978) とStone & Neale (1984) 以外はすべてLazarusらの定義 (Lazarus & Folkman, 1984) に基づくか、あるいはWays of CopingといったLazarusらが作成した尺度から収集されており、因子分析による検討が行われている（たとえば 林・佐藤・棗田, 1992；McCrae, 1984；Amirkhan, 1990）。

Table 2を見ると、この領域に含まれる尺度には、「問題解決」（Amirkhan, 1990）、「計画的な問題解決」（Folkman, Lazarus, Gruen, DeLongis, 1986）、「問題中心型」（林・佐藤・棗田, 1992）など、問題焦点型の対処に関する項目が多く含まれている。その理由としては、これらの項目がLazarusらの定義や尺度に基づいて作成されているということが考えられる。また、McCrae (1984) が老人を対象者に含めた尺度作成を行っているが、下位尺度には「否認」、「空想」、「ポジティヴ思考」、「気そらし」、「希望的思考」など、認知に関する下位尺度を多くあげている。これは、活動領域や活動量が若年層に比べると制限されている老年期に特有の特徴であるかもしれない。このように、領域内でさらに対象者に特有なコーピングが見られるのも特徴のひとつである。

また、林他（1992）以外はすべて海外の尺度であるので、本邦で利用する前に十分な心理測定学的な検討を行う必要があると言える。さらに、一般領域では対象者を特定していないために、どのような人たちに適用してよいかの判断が難しい。しかしながら、各尺度の使用者の想定する対象者が作成時の対象者と一致する場合には、領域に特有なコーピングを測定できるという点は利点であると考えられる。

5-4　臨床領域

臨床領域には、障害を持つ個人や患者を対象とした尺度が含まれ、「痛み」等の症状そのものに対するコーピングや、障害や疾患があることによって生じる問題やストレスに対処するためのコーピングを測定することを目的として作成されている尺度が多い。尺度作成にあたっては、

既存の尺度などの先行研究もしくは面接や自由記述による項目収集の後、因子分析による解析が行われているものがほとんどである。しかし、中には個々の疾患や症状などの各状況に合わせて、先行研究を参考にしてコーピングの分類を行っているものも見られた（Billings & Moos, 1984；岡谷，1988）。

下位尺度構成の特徴としては、Billings & Moos（1984）をはじめとして、「問題焦点—情動焦点」といった観点からの尺度が構成されていることがあげられる。また、「無視」(Kleinke, 1988)、「認知的コーピングと抑圧」(Rosenstiel & Keefe, 1983)、「虚無」（岡，1987）といった抑制的な対処や、「気晴らし」(Kluwin, Blennerhassett, Sweet, 1990)、「回避」（岡谷，1988）といった回避的な対処が多く見られることも特徴的である。

このように、臨床領域の各尺度においては、異なった問題の背景や特徴を持つ特定の対象者のコーピングを測定しているために、分類軸の特定など一貫した傾向を見いだすことは困難である。しかしながら尺度の使用対象や適用目的が明確であるために、各尺度を利用した研究が行いやすい領域であると言える。また、海外文献については尺度の信頼性と妥当性がほとんどの研究で検討されているものの、国内文献については数も少なく、信頼性と妥当性についても十分な検討がなされているとは言えない。したがって、本邦における臨床領域のコーピング尺度の一層の研究が望まれる。

5-5　その他の領域

その他の領域におけるコーピング尺度は、慢性疾患患者を抱える家族のコーピング（野嶋・中野・足利，1987)、在宅障害老人の介護者のコーピング（翠川，1993)、ダウン症児の親のコーピング(Damrosch, Lenz, Perry, 1985)といった特定の対象者において想定されるストレッサー（たとえば、介護）に対するコーピングを評価する目的で作成されている。したがって尺度は、対象者の自由記述から得られた項目、あるいは、既存の尺度項目を当該の対象者に適切であると思われる表現に修正した項目を基に作成されている。

Table 2を見ると、この領域に含まれる尺度においては、いずれも問題解決型の対処行動や回避型の対処行動に加え、「認知型」（翠川，1993)、「順応的対処」（野嶋他，1987)、「願望的思考」と「認知の再構築」(Damrosch, et al., 1985）といった認知的方略に関する下位尺度があることが共通している。これは、慢性疾患や障害老人、ダウン症といった問題解決が困難であると思われるストレッサーに対しては、「自己の考え方を変える」、あるいは「肯定的に考える」といった認知的方略が採用されることが多いためであると考えられる。

以上のように、その他の領域に含まれる尺度は、作成時に想定されたストレス状況や対象者の特徴が考慮されて作成された尺度であることから、適用領域が明確である点が尺度利用上の利点であるといえる。しかしながら、作成時のサンプル数が少ない点や、妥当性が検討されていないなどの問題点が残されており、因子構造、および尺度の妥当性などに関する検討が必要である。

6．考　察

本研究の目的は、コーピングの測定と尺度の開発に関する論文の中から、コーピング尺度の作成を行っている論文を展望し、そこで述べられているコーピングの定義や分類法、尺度の構成等について検討を行うことであった。そして、コーピングの概念に関する理解と、コーピングを測定するときの問題点を検討し、今後コーピングを研究するときに必要とされる要因を検討することであった。

収集された海外論文において引用されているコーピング尺度の中で最も多かったものはLazarus & Folkman（1984）によるWays of Coping Checklistであり、その状況は国内でも同様の傾向にあった。

一方、今回収集された論文において明らかにされたコーピング研究の動向は、一つの尺度を用いた研究が積み重ねられていると言うよりむしろ、次々と新しい尺度が作成されているという状況であった。このことは、同じ領域、あるいは同じ対象者を扱っている研究であるにもかかわらず、データやその結果を比較することを困難にさせている原因になっていると考えられる。今後のコーピング研究の発展を考えたとき、信頼性と妥当性の検討された適切な尺度が多くの研究で用いられ、研究間でのメタアナリシスが可能になるとともに、コーピングの機能を明らかにされなければならない。また、適切な測定尺度が未だに存在しない、あるいは研究数が少ない領域においては、新たなコーピング尺度の作成が待たれるところである。

学校領域におけるコーピング尺度は、Lazarus & Folkman (1984) の概念を参考にした論文、あるいはLazarusらの尺度を引用して下位尺度が作成あるいは分類されているものが多かった。小中高校生を対象とした尺度では、「サポート希求」がほとんどのものに含まれていた。いずれの尺度も学校場面あるいは、彼らの生活全般におけるストレスに対するコーピングを測定するために作成された尺度であり、教師あるいはスクールカウンセラーなどによって利用されやすいと考えられた。これに比べて、大学生を対象としている論文においては、必ずしも大学生に特徴的なコーピングを測定しているとは限らず、一般成人を想定しながらも大学生を対象としている研究が多く見られた。

職場領域におけるコーピング尺度では、「肯定的行動・認知」(庄司・庄司, 1992) といった認知的コーピングが、すべての尺度の下位尺度に含まれていた。また、看護婦や教職員のように対象者の職種を限定して尺度が作成されているものもあり、それぞれの職場でのコーピングは細かく、正確に測定できるようになってきていると言えよう。

一般領域における尺度は、ほとんどがLazarus & Folkman (1984) の定義に基づいたコーピングを測定することを目的として作成されており、使用されている項目もLazarusらのものを用いたものが多かった。すべての尺度の下位尺度に問題焦点型対処が含まれている。しかし、対象者を特定していないことから、問題焦点型対処の他に共通した下位尺度が見られないことがこの領域の特徴としてあげられる。対象者が特定されていないため、使用に当たってはどのような人たちに適用してよいかの判断が難しい。今回検討の対象となった論文は、ほとんどが海外の文献であり、この領域の本邦における研究が必要である。

臨床領域における尺度は、特定の障害や疾患あるいは症状を持つ人を対象として作成されており、下位尺度は問題焦点－情動焦点の観点から分類されたものが多かった。また、回避的対処も多く見られていた。対象者が限定されており、尺度の一貫した特徴を見つけることは難しいが、それぞれの対象者に特徴的なコーピングを捉えていると考えられ、今後対象者を増やし、信頼性と妥当性の検討が積み重ねられることが必要である。

最後に、その他の領域において作成されているコーピング尺度には、問題解決型あるいは回避型の対処に加え、認知的方略に関する下位尺度が共通して認められた。いずれの尺度も、対象者に特定のストレス状況や対象者の特徴を考慮して作成されている。

また、上に述べたように、今回検討を行った全ての領域において、Lazarus & Folkman (1984) によるWays of Coping Checklistが最も多く引用されていた。その中には、Lazarusらの尺度をそのまま使用、あるいは一部を引用して作成された尺度もあったが、多くの尺度においては、Lazarus & Folkman (1984) のコーピングの概念が参考にされていた。すなわちコーピングの下位分類においては、問題焦点－情動焦点、あるいは接近－回避という考え方がおおむね支持されていると思われる。このこと

は各論文の因子分析結果をみても、問題焦点－情動焦点、あるいは接近－回避といった因子が下位尺度に示されていることからもわかる(Table 2)。

しかしそれぞれの尺度を詳細に見ると、尺度を構成する項目の内容は、対象者によって大きく異なっていることがわかる。たとえば「学校領域」の小中高校生を対象とした尺度では、「サポート希求」が多く含まれているが、「職場領域」では認知的対処がどの尺度にも見られる項目となっている。また「臨床領域」では回避的対処がみられるなど、それぞれの領域に特徴的なコーピングがあることが今回の結果からわかる。このことは、コーピングの機能は状況、あるいは領域を越えて普遍的であるが、具体的なコーピングの内容は各状況・領域に特異的であることを示している。対象者固有のコーピングの特徴を理解するためにも、尺度の改善が必要であろう。コーピングの機能を明らかにしようとすると、コーピング尺度が単独で用いられることは少なく、コーピング尺度に加え、ストレス反応尺度や種々のパーソナリティ変数を測定する尺度等が併せて用いられる。そのとき、項目数の多い尺度は実施に困難さを伴うことが多い。したがって、項目数が少なく、しかも個人のコーピングの特徴を把握することのできる尺度を開発することは、今後検討されなければならない課題である。

以上のように、多くのコーピングを測定する尺度が作成されている。今回展望した尺度の中で、海外の文献では信頼性・妥当性とも検討されているものが多かったが、本邦の論文においては、信頼性のみが検討されているもの、あるいは信頼性・妥当性のいずれも検討されていないものも見受けられた(Table 2)。作成された尺度が今後活用されるためには、信頼性と妥当性の検討は必須条件の一つである。また、領域によっては尺度作成時のサンプル数が少ない研究も見られ、これらの点は今後改善されなければならない。

引用文献

Aldwin, C.M. 1994 Stress, coping, and development : Testing and interpreting interaction. London : Sage.

Amirkhan, J.H. 1990 A factor analytically derived measure of coping : The coping strategy indicator. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 1066-1074.

Billings, A.G. & Moos, R.H. 1981 The role of coping responses and social resources in attenuating the stress of life events. *Journal of Behavioral Medicine*, **4** (2), 139-157.

Billings, A.G. & Moos, R.H. 1984 Coping, stress, and social resources among adults with unipolar depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46** (4), 877-891.

Damrosch, S.P., Lenz, E. R., & Perry, L. A. 1985 Use of parental advisors in the development of a parental coping scale. *Maternal Child Nursing Journal*, **14** (2), 103-109.

Dise-Lewis, J. E. 1988 The life events and coping inventory : An assessment of stress in children. *Psychosomatic Medicine*, **50**, 484-499.

Endler, N.S. & Parker, J.D.A. 1990 Multidimensional assessment of coping : A critical evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58** (5), 844-854.

Epstein, S. & Meier, P. 1989 Constructive thinking : A broad coping variable with specific components. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 332-350.

Fanshawe, J. P. & Burnett, P. C. 1991 Assessing school-related stressors and coping mechanisms in adolescents. *British Journal of Education Psychology*, **61**, 92-98.

Folkman, S. & Lazarus, R.S. 1980 An analysis of coping in a middle-aged community sample. *Journal of Health and Social Behavior*, **21**, 219-239.

Folkman, S. & Lazarus, R. S. 1985 If it changes it must be a process : Study of emotion and coping during three stages of a college examination. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 150-170.

Folkman, S., Lazarus, R.S., Gruen, R. J. , & DeLongis, A. 1986 Appraisal, coping, health status, and psychological symptoms. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 571-579.

Hatton, C. & Emerson, E. 1995 The development of a shortend 'Ways of Coping' questionnaire for use with direct care staff in learning disability services. *Mental Handicap Reserch*, **8** (4), 237-251.

林峻一郎・佐藤浩信・嶽田衆一郎 1992 日常生活ストレスと心理的対処行動の対応する２種のパターン 社会精神医学, **15**, 65-76.

Heppner, P.P., Cook, S.W., Wright, D.M., & Johnson, W.C. 1995 Progress in resolving problems : A problem-focused style of coping. *Journal of Counseling Psychology*, **42** (3), 279-293.

伊藤武樹 1993 中学生の悩みとその対処行動 学校保健研究, **35**, 209-219.

伊藤武樹 1994 中学生の悩み及び自覚症状とその対処行動の関連：数量化Ⅱ類を用いた検討 学校保健研究, **36**, 145-157.

Jalowiec, A., Murphy, S. P., & Powers, M. J. 1984 Psychometric assessment of the jalowiec coping scale. *Nursing Reseach*, **33** (3), 157-161.

神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1995 対処方略の３次元モデルの検討と新しい尺度（TAC-24）の作成 教育相談研究, **33**, 41-47.

神田信彦・大木桃代 1998 中学生のストレス対処：統制感と感情的反応の機能 健康心理学研究, **11** (1), 39-47.

Kinicki, A. O. 1990 Explication of the construct of coping with involuntary job loss. *Journal of Vocational Behavior*, **36**, 339-360 .

Kleinke, C. L. 1988 The depression coping questionnaire. *Journal of clinical Psychology*, **44** (4), 516-526.

Kluwin, T., Blennerhassett, L., & Sweet, C. 1990 The rivision of an instrument to measure the capacity of hearing-impaired adolescents to cope. *The Volta Review*, **92** (6), 283-291.

工藤 力 1986 思春期の孤独感に関する研究 心理学研究, **57** (5), 293-299.

黒田浩司・宮田徹・土屋満明・山本和郎 1988 ストレスと対処行動に関する研究 慶應義塾大学社会学研究科紀要, **28**, 73-80.

Latack, J.C 1986 Coping with job stress : measure and future direction for scale development. *Journal of Applied Psychology*, **71** (3), 377-385.

Lazarus, R. A. & Folkman, S. 1984 Stress, appraisal, and coping. New York : Springer (本明寛・春木豊・織田正美 1991 ストレスの心理学 実務教育出版).

Levine, S. & Ursin, H. 1980 Coping and health. New York : Plenum.

McCrae, R. R. 1984 Situational determi-

nants of coping responses : Loss, threat, and challenge. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46** (4), 919-928.

翠川純子　1993　在宅障害老人の家族介護者の対処（コーピング）に関する研究　社会老年学, **37**, 16-26.

三川俊樹　1988　青年期における生活ストレッサーと対処行動に関する研究　カウンセリング研究, **21** (1), 1-13.

三浦正江・坂野雄二　1996　中学生における心理的ストレスの継時的変化　教育心理学研究, **44** (4), 368-378.

三浦正江・嶋田洋徳・坂野雄二　1997　中学生におけるテスト不安の継時的変化：心理的ストレスの観点から　教育心理学研究, **45**, 31-40.

諸井克英　1989　大学生における孤独感と対処方略　実験社会心理学研究, **29**, 141-151.

中村伸枝・兼松百合子・内田雅代　1993　青年の対処行動測定用具の開発：日本版「Adolescent Coping Orientation for Ploblem Experience」の検討　日本小児保健学会講演集, **40**, 550-551.

野嶋佐由美・中野綾美・足利幸乃　1987　「家族対処行動に関する質問紙」の開発（第一報）高知女子大学紀要自然科学編, **35**, 65-77.

岡　茂　1987　病虚弱児のもつ心理的問題への対処行動に関する因子分析的研究　特殊教育研究, **24** (4), 30-39.

岡谷恵子　1988　手術を受ける患者の術前術後のコーピングの分析　看護研究, **21** (3), 53-60.

大迫秀樹　1994　高校生のストレス対処行動の状況による多様性とその有効性　健康心理学研究, **7** (1), 26-34.

大竹恵子・島井哲志・嶋田洋徳　1998　小学生のコーピング方略の実態と役割　健康心理学研究, **11** (2), 37-47.

Ottens, A. J., Tucker, T. L. K. R., & Robbins, S. B. 1989 The construction of an academic anxiety coping scale. *Journal of College Student Development*, **30**, 249-256.

尾関友佳子　1990　大学生のストレス自己評価尺度：質問紙構成と質問紙短縮について久留米大学大学院比較文化研究, **1**, 9-32.

尾関友佳子　1993　大学生用ストレス自己評価尺度（SSRS-YO）の改訂・トランスアクショナルな分析に向けて　久留米大学大学院比較文化研究科年報, **1**, 95-114.

尾関友佳子・原口雅浩・津田彰　1991　大学生の生活ストレッサー，コーピング，パーソナリティとストレス反応　健康心理学研究, **4** (2), 1-9.

Patterson, J. M. & McCubbin, H. I. 1987 Adolescent coping style and behaviors : Conceptualization and measurement. *Journal of Adolescence*, **10**, 163-186.

Pearlin, L. & Schooler, C. 1978 The structure of coping. *Journal of Health and Social Behavior*, **19**, 2-21.

Roger, D., Jarvis, G., & Najarian, B. 1993 Detachment and coping : The construction and validation of a new scale for measuring coping strategies. *Personality and Individual Differences*, **15** (6), 619-626.

Rosenstiel, A. K. & Keefe, F. J. 1983 The use of coping strategies in chronic low back pain patient : Relationship to patient characteristics and current adjustment. *Pain*, **17**, 33-44.

坂田正輝　1989　心理的ストレスに関する一研究：コーピング尺度（SCS）作成の試み　早稲田大学教育学部学術研究：教育・社会教育・教育心理・体育編, **38**, 61-72.

Sidle, A., Moos, R., Adams, J., & Cady, P. 1969 Development of a coping scale. *Archive General Psychiatry*, **20** (2), 226-232.

嶋田洋徳・岡安孝弘・戸ヶ崎泰子・坂野雄二・浅井邦二　1993　小学生の心理的ストレス過程　日本心理学会第57回発表論文集, 596.

島津明人・小杉正太郎　1997　従業員を対象としたストレス調査票作成の試み（2）コーピング尺度の作成　早稲田心理学年報, **30** (1), 19-28.

神藤貴昭　1998　中学生の学業ストレッサーと対処方略がストレス反応及び自己成長感・学習意欲に与える影響　教育心理学研究, **46**, 442-451.

庄司正美・庄司一子　1992　職場用コーピング尺度の作成及び信頼性妥当性の検討　産業医学研究, **34**, 10-17.

Steptoe, A. & Appels, A. 1989 Stress, personal control, and health. Blussel-Luxembourg : ECSC-EEC-EAEC : (津田彰　監訳　1995　ストレス, 健康とパーソナル・コントロール　二瓶社).

Stone, A. A. & Neale, J. M. 1984 New measure of daily coping : Development and preliminary results. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46** (4), 892-906.

Tobin, D. L., Holroyd, K. A., Reynolds, R. V., & Wigal, J. K. 1989 The hierarchical factor structure of the coping strategies inventory. *Cognitive Therapy and Research*, **13** (4), 343-361.

Zeider, M. & Endler, N. S. 1996 Handbook of coping : Theory, research and application. New York : John Wiley & Son.

[2000年5月10日受理]

Review on Development of Coping Scales and their Validation

Noriko Kusakabe*, Wakana Chida**, Shunbun Chin*
Akio Matsumoto*, Junko Tsutsui***, Ken-ichi Ozaki****
Taku Ito*, Nanako Nakamura*, Masae Miura*****
Shin-ichi Suzuki****** & Yuji Sakano*******

Abstract

The purpose of this study was to review the recent research on the development of coping scales and to discuss the issues about the use of the coping scale in further research. Fifty three articles on the development of the coping scale were selected from 465 articles in which "coping" was included as a keyword in the data base.

Coping scales were classified into five categories by subjects used in the article: school setting (university and other schools including the elementary and secondary schools), work setting, general setting, clinical setting, and others. Half of the total coping scales were developed in the school setting, and most of them included subscales which measure children's coping behavior with interpersonal problems and academic activities. In a work setting, scales include problem-oriented coping behavior. In a clinical setting, most scales measure patients' coping behavior with pain and other physical and psychological dysfunctional states. In miscellaneous settings, all scales were developed only for the specific subjects, and included problem-oriented coping, avoidant coping behavior, and cognitive coping as subscales.

Although many different scales have been developed, it is difficult to compare the results and to conduct a meta analysis among those studies whose subjects were identical. There were many studies in which insufficient psychometric validation was conducted. It was suggested that the further research was needed to develop a more reliable scale on coping.

Key words : coping, coping scale, subscale, reliability, validity

*Graduate School of Human Science, Waseda University
**(Kanagawa Rehabilitation Hospital)
***(Department of Psychosomatic Medicine , Kagoshima University Hospital)
****(Motorola Japan. Ltd. Human Resourses Organization, Grobal Talent Supply)
*****(Osaka Institute of Technology)
******(Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University)
*******Graduate School of Human Science · School of Human Science, Waseda University